

# Neighbour Rosicky by Willa Cather

—Desire under all desires, Truth under  
all truths<sup>(1)</sup> を求めて—

柴田 恭子

## 序

ウィラ・キャザーの作品は辺境文学<sup>(2)</sup>と名づけられる分野に属する。アメリカ中西部、特にネブラスカ州・ユタ州等を中心とする地域が作品の舞台であるからだ。文学的背景の全くない、開拓者ばかりの地域を作品にするには大変な勇気を必要としただろう。しかし出来上った作品に対して批評家たちは口をそろえて次のように言うのだ。

「その小説は力強さと個性を持っている。しかし批評家が正しく言葉で評価することの出来ない作品だ。味わうことの出来る美点が多い作品だ。」

つまり、キャザーは人間の真実に触れたところで書いているということなのだろう。

## 『隣人ロジキー』—父に捧げるレクイエム

### 〔I〕『隣人ロジキー』に至るまで

1928年3月、キャザーは父親を失った。88才で逝った父親に55才の娘はこの作品を捧げた。細やかな愛情と理解の通いあった父娘だった。成功作『おお、開拓者よ』<sup>(3)</sup>を書いてから15年経っていた。15年間に9篇の大作を発表し、ピューリッツア賞をはじめとする数々の栄誉を手にした。作家としての才能のみならず、編集者としての才能も余すところなく若い頃には発揮した。父を亡くした今、キャザーは自分の生涯、父と共にこの世に在った時間をふり返りつつ、短篇『隣人ロジキー』を書きあげたのである。

キャザーは、祖父ウィリアム・キャザー<sup>(4)</sup>の大牧場で1873年に生まれた。祖先は1750年ころアイルランドから移住してきたジャスパー・キャザー<sup>(5)</sup>だ。彼はアメリカで最初に開拓されたヴァージニア州に広大な土地を手に入れ農場を開いたのだった。しかしこの近辺は南北戦争ですっかり荒されたため、復興のはかばかしくないヴァージニアに見限りをつけ、一族揃って<sup>(6)</sup>ネブラスカ州へと移り住むのである。祖父の新しく作った牧場キャザートン<sup>(7)</sup>には、たくさんのヨーロツ

パからの移民が働いていた。新世界へ来て一旗あげようとしていたスウェーデン人・ノールウェー人・チェコ人（ボヘミアン）・ドイツ人・ロシア人・スイス人等とキャザーは知りあい、ヨーロッパの生活、思想に接し、血の流れの中にあったヨーロッパに対しての郷愁をかきたてられたのであった。

法律を勉強した父と南部生まれの母は田舎に埋もれることに耐えられず、レッドクラウドの町に移り住むことに決意した。そして、父チャールズ・キャザーを先頭にウイラー家は町生活を始めるのである。町でウイラーは文学を芸術をヨーロッパをさらに知る機会に恵まれた。しかしウイラーにはおよそ女の子らしいところはなく、たまたま伯父一家が結核に冒されたり、祖父にその兆候が見え医者非常に世話になったりしたことから、将来の職業を医者と決め、自らをウイリアム・キャザー<sup>(9)</sup>博士と名乗り、男の子のような髪型、服装をしていたことさえあった。大学に入ってからドレスは殆んど着ず、黒ずんだ男子向きのスーツに身をかため、大学の廊下をのし歩いたそうである。

当然恋愛経験にも恵まれず、従って結婚については懐疑的で、お互い愛しあわぬどころか、夫が妻を、妻が夫を『我が終生の敵』<sup>(9)</sup>と憎みあう場合もすくなくないと考えたようになった。しかし、父を亡くした今、しみじみ夫婦のあたたかさ、信頼を、理解を『隣人ロジキー』の中であうたいあげたのである。

Life had gone well with them because, at bottom, they had the same ideas about life. They agreed, without discussion, as to what was most important and what was secondary. They didn't often exchange opinions, even in Czech—it was as if they had thought the same thought together. <sup>(10)</sup>

二人の場合は結婚生活はうまくいっていた。というのは、心の奥底では人生について二人は同じ考えを持っていたのだ。二人は議論などしなくても、何が一番大切で、何がその次に来るかということに関してはいつも意見が一致していたからだ。二人は意見をチェコ語で交わすことさえめったになかった。そういった二人の様子を、同じ考えを二人で一緒に考えているといってもよかった。

話をウイラーに戻そう。彼女は大学を卒業すると約15年間編集者としての才能を発揮するのだ。勿論、詩集や短篇小説は多少手がけてはいたのだが、38才で作家となる決心と準備が整うと、非常に人気のあったマクリューズ社の副編集長を辞めた。決心とは長い間心に抱いてきたテーマを書こう、新しい創作の脈脈を掘りあてようという決心であり、準備とは病弱な家族を養うに足る貯金があることであった。

ヨーロッパの伝統と新しい<sup>アメリカ</sup>国と。キャザーの中ではこの二つのものがいつも対立していた。

アメリカに伝統がないこと、文化がないことは悪であるとすら思い、ひたすら、ヨーロッパ人、コスモポリタンであろうとし、最初の小説『アレクサンダーの橋』<sup>(11)</sup>を書いた。ヘンリー・ジェイムズの作品に酷似していながら、未熟さの方が目立ち不評だった。しかし、若いころ書いた短篇にも目立っていた主人公たちの環境への不適応<sup>(12)</sup>、周囲の者からうける冷遇<sup>(13)</sup>といったテーマははっきりと打ち出されていた。若い頃得意としたテーマは、キャザーの実生活と一致するものが多かった。そして天才は家庭や郷里の町では尊ばれないものだ、だから「豚ののたくる泥地」から出なくては、とキャザーは故郷をあとにして、ニューヨークに住むのである。以後この「醜いあひるの子」<sup>(14)</sup>は白鳥になることを夢みて都会に住みついてしまったのだ。長篇第二作目の『おお、開拓者よ!』を書いた時ですら、思い出をたどって書くといった、第三者的精神、超越的精神<sup>(15)</sup>、じかに事件に手をふれない客観的精神でペンを運ばせたのである。対象との間に距離をおくこと、これはキャザーの生き方でもあった。

そしてついにサラ・オーン・ジュエット (Sarah Orne Jewett (1849-1909)) 女史のとの運命的出会いが訪れたのだ。

—You must find your own quiet center of life.

—Write as it is, don't try to make it like this or that.

——あなたは人生の静かな中心をみつけなくてはなりません。

——あるがままに書きなさい。こんな風を書こうあんな風を書こうと思ってはいけません。

キャザーはこの忠告に従いのびのび開拓者たちを描いた。そして『おお、開拓者よ!』中で、人間と大地との絆について次のように語っている。

We come and go, but the land is always here. And the people who love it and understand it are the people who own it—for a while.<sup>(16)</sup>

わたしたちは来てもいずれば去っていきます。しかし土地はいつまでもここに 있습니다。そして土地を愛し土地を理解する人がその土地の持主なのです。わずかな間ですが。

この作品で目立つもう一つのことは、キャザーが二つの恋を書いているということだ。主人公アレクサンドラと幼なじみのカール・リンストラムのあまりにも長かった恋と、アレクサンドラの弟と人妻マリーの短かくはかなく終った悲劇的な恋と。続いて1913年に書かれた『ひばりの歌』<sup>(17)</sup>はこれまでと違って変って人々の善意につつまれて育った少女ジーアの話である。この作品ではキャザーがいかに音楽に通じていたかが、劇場の情景が過ぎる位に書かれている。

1918年、45才のウィラは、久しぶりにネブラスカへと赴く。そこで幼な友達のアンナ・パヴェルカ<sup>(18)</sup>と出会う。そしてその帰路にはもう『私のアントーニア』<sup>(19)</sup>の構想が出来上がっていて、筆は帰宅後スラスラ運んだ。すぎ去った楽しい日々を復活を願う作品はこうして貴重なモデルに出会うことによって何の抵抗もなく書かれた。キャザーは非常に強烈な個性をこの作品で完成させている。決して人を羨まず、決して分不相応なことはせず、正しく人を尊敬し、かつ自分たちの生活に根ざしたたくましい実行力を持つ、運命を切り開く努力を惜しまないアントーニアである。語り手ジム（ウィラ）は二度目の結婚をしたアントーニア（アンナ）を訪問したとき、アントーニアの子供たちに出会いすっかり圧倒されてしまう。

—big and little, tow heads and gold heads and brown, and flashing little naked legs; a veritable explosion of life out of the dark cave into sunlight<sup>(20)</sup>

大きい、小さい、頭の髪がうすいの、金色の、とび色の、ぱあっとあらわな小さな脚をひらめかせながらかけあがってきた。それはうす暗い穴蔵から日光の中に躍り出たまぎれもない生命の爆発であった。

『私のアントーニア』にみられる他の個性は社会的に生きる女である。自立してみごと社会人として（女としてでなく）生きぬく女性を登場させたということである。もう一つは人間と自然との調和、自分自身を畑にころがって陽をあびているかぼちゃに同化させてしまう個性である。そして、ここにも開拓地という環境に順応出来なかった、古い都のバイオリニスト・アントーニアの父・シメルダ氏の死がある。死ぬことですら自分で決心出来なさそうなもの静かなシメルダ氏が鉄砲で自殺するのである。

You never really know a man, he said, until you saw him die.<sup>(21)</sup>

死んでみないと、その人が実はどんな人だったかわからないものだ。

つづいて1922年に、戦争をテーマにした『我等の一人』<sup>(22)</sup>を書いてピューリッツア賞を獲得した。現在アメリカでどんなふうに生きていったらいいかを悩む青年がついには戦争に身を投じるのである。何とも、誰とも結びついていない<sup>(23)</sup>何かとの絆が何一つない青年達は喚声をあげて戦争へと走るのである。戦争へ走り、戦争に散り、傷ついたたたくさんのアメリカ人たち、たたくさんの迷えるアメリカ人たち。そして、その集大成が『迷える夫人』<sup>(24)</sup>であろう。キャザー自身迷いの境地にあったこともあって、ただ筆の先からほとぼり出るものを書くのではなく「調整」をして書かれている。西部開拓史時代ならば輝かしい偶像として生きられる美しい夫人も、合理化され、機械化された現代文明の中では所詮、腐りただれていく人間にすぎないというみじめな

敗北感を表明している。夫人の夫であるフォレスター大尉は“Happy Days”の郷愁に生き、死ぬ。前々作、『私のアントーニア』にもみられるのだが、これは自然と人間が一つであった時代を思う追想の記である。『私のアントーニア』の冒頭に載っているウエルギウスの詩のように。

Optima dies……prima fugit

いと楽しき日……いち早く過ぎゆく

次の『教授の家』でも、古い世代と新しい世代に分れ、しかも一つの家族の中で、教授と（古い世代—古い家に住む）妻と二人の娘夫婦（新しい世代—新しい家に住む）という設定になっている。教授の味方は実際には姿を見せない教え子トム・アウトランドだけである。この作品では、過去が過去として消えてしまうのではなく、断崖の町（ブルー・メイサ）・死の都が、輝かしい過去として凍結したままトムによって突然教授の前にさし出されるのである。輝かしい“石の時代”の過去が、トムの手で暴かれながらも守られてきた不滅の平和がトムの手記の中にあったのだ。教授は思う。自分の経歴も、妻も家族もそれは自分に起った一連の出来事にすぎなかったのだと。そう考えたとき、周囲のものとの、周囲の人々との不適應に悲しまなくなった。それらからうける冷遇に苦しまなくなった。何故なら今は教授は教授の本質に戻っていたから。

He seemed to be at the root of the matters; Desire under all desires, Truth under all truths

彼には自分が事物の根幹にいるように思えた。すべての欲望中の「欲望」、すべての真理中の「真理」にいるように思えたのだ。

教授は救われた。しかし妻の側はどうだろう。『我が終生の敵』では、金持の叔父の家をとり出してまで結婚した挙句、貧乏と病気ゆえ宗教に傾倒してしまった女主人公マイラが、自らの罪悪感を掘り下げついにこう叫ぶのである。

Why must I die like this, alone with my mortal enemy?<sup>(25)</sup>

何故、私は私の許しがたい敵と二人だけで死んでいかななくてはならないのか。

自分にとって非常に親しい者、夫や妻、子供や親がひよっとすると愛情の仮面をかぶって襲いかかる一番怖い敵なのではないか、とするとその逃げ道はどこだ——マイラにとっては宗教であった。

1927年、大作『大司教に死は来たる』<sup>(26)</sup>を書いた。そしてキャザーの中にあった未開の地アメリカと伝統と芸術・教養の地ヨーロッパをこの作品でいっきよに結びつけてしまったのだ。伝統のないことを嘆き、ひたすら心をヨーロッパに向けつけていた若い時代の心に、解決を与えたのだった。

アメリカ奥地の神秘的な怪奇な、しかも清浄な風景、かつて『教授の家』のセント・ピーターを無私の境地に誘いこんだメーサ（岩の高台）や砂漠をフランス人伝導師 J. マリー・ラトゥールが訪ずれるのである。優秀で若く学者の家系のウトラルとその協力者ヴァイヤン（パン屋の息子ですでに40才になっている）との正反対の性格の二人の細やかな友情。——おそらく聖職者なら敵同志にならないだろうとキャザーは考えたのだろうか。

when one thinks of it, a soup like this is not the work of one man. It is the result of a constantly refined tradition. There are, perhaps, a thousand years of history in this soup.

「考えてみればこんなスープは一人の人間が作れるものではない。たえず洗練されていく伝統の産物だよ。このスープの中には千年ちかい歴史が入っている」<sup>(27)</sup>

キャザーは開口一番上記のように言わせながら、次第に両文化を融和させているのである。自然を支配しようとする白人と、自然の中にとけ込もうとするインディアンを描く。風景そのもののようなインディアンを、あるいは「人間となった風景」を伝統の血の流れるラトゥールは病床で思う。ラトゥールには「たのしかった日々」(Happy Days!) などはない。何故なら過去はみな彼の手の届くところにあり、死ぬのも病気だからではなく、長い間生きてきたために死ぬのだから。

He sat in the middle of his own consciousness: none of his former states of mind were lost or outgrown. They were all within reach of his hand, and all comprehensible<sup>(28)</sup>.

彼は自分の意識の中央に座っていた。昔の状態は何一つとして失われたり、無益になったものはなかった。それらはすべて彼の手の届くところにあり、すべて理解することが出来た。

## 〔II〕『隣人ロジキー』

この作品が載った最初の雑誌は *Woman's Home Companion* (April, 1930) である。4年後「無名の人々の運命」<sup>(29)</sup>とタイトルがついた短篇集に入れられた。

主人公は、アントン・ロジキー、その妻はメアリー。いずれもチェコ人で、いずれもモデルが

ある。まず、妻のメアリーの方であるが、キャザーが、レッドクラウドの町に両親と移り住んで間もなく友人となったメアリー・マイナーの家の女中、アンナ・パヴェルカ<sup>(30)</sup>がモデルである。12才の時アンナはアメリカに上陸し、辛い思いをして生活しているうちにマイナー家に女中として雇われることになるのである。教えられたわけでもないのにいつの間にか裁縫もおぼえ、常に明かるく、愛する人のため喜んで骨折ることを惜しまない尽きることのない精力の持主だった。18才で最初の結婚に破れ、やがてボヘミア人と結婚して、たくさんの力強い、たくましい子供たちを連れてウイラの前にあらわれた。そしてその子供たちの父親がまぎれもなくこの作品の主人公ロジキーなのである<sup>(31)</sup>。キャザーと会うまでのロジキー氏の経緯は、詮索しないでおこう。それより、キャザーの作りあげたアントン・ロジキーの前歴が、都会と田舎とそれぞれ場所が違って、ずい分似ている、ある部分ではまさしくロジキーはウイラである。

☆                         ☆                         ☆                         ☆

年 令	キャザーの生涯（作家になるまで）	ロジキーの生涯（結婚するまで）
1才～2才	祖父を中心としてヴァージニア州の大牧場で生活、祖父、伯父ネブラスカへ。	両親揃っていた。母死亡のため、土地を借りて牧場を持っている母方の祖父母の所へ。
	幼少の頃家族におこったさまざまな異変。	
2才～12才	ヴァージニアでの生活から、ネブラスカ・キャザートンへ。祖父の農場でたくさんのヨーロッパ人に出会う。	祖父母の所で細やかな愛情と大地、動物、植物とのきずなを手に入れる。
	ネブラスカの自然を満喫し、“My Antonia”の中のジム・バーデンのように自然そのものになる喜びを身につける。	
12才～18才	学業に対する熱意（但、病人が多かったため医学を志す）とヨーロッパに対する関心、伯父、伯母結核のため“私は病院の看護婦です”と嘆く。	祖父の死後、父、継母と暮すが、思春期に入りかけていたアントンと継母との関係がうまくいかず、父はロンドンで働いている従兄をたよるよう旅費を工面してくれる。
	両者共に学業にはげむ年令ながら、家庭内の事情が多く辛い6年間。	
18才～22才	ラテン語学校からネブラスカ州立大学へ。学業はつづくが、ネブラスカ州大凶作。キャザートン抵当に入り生活は非常に苦しい。文筆を主とする才能がみとめはじめられる。大学を卒業、ピッパーグで記者の仕事をする。	ロンドンに行ったものの、従兄はみつからず、貧しいドイツ人の仕立屋で“貧乏とはどんなことか” <sup>(32)</sup> を知りつくす生活をする。仕立屋の仕事をおぼえ、チェコ人の保護者の紹介でニューヨークに仕事をみつける。
	ウイラ、ロジキーとも人生で一番金銭的に辛い時に直面する。この時期の経済的な恐怖はキャザーに作家生活に入るまでつきまとった。それぞれ修練の期間の後、社会へ出て、必死に働く。	
23才～27才	最初の5年間は一生で一番自分を酷使した時期だと、その仕事への没頭ぶりを回想している。	仕立屋の仕事に専心し、ニューヨーク生活に満足し、お金が入ることに満足してすごした。
	ウイラはすぐ消えていく運命にある記事を書く空しさを、ロジキーは、大都会の空虚感 <sup>(32)</sup> に苦しむ。	

28才～38才	記者をやめ、ハイスクールの教師となる。最初の詩集を出版し、ヨーロッパ旅行をする。短篇集の出版し、乞われて「マクルアズ・マガジン」社につとめ、副編集長として活躍後、サラ・オン・ジュエット女史に会う。	27,8才の独立記念日に、ロジキーはあらためて、自分の中の大地との絆に気づく。自由を、地平線を求めるためニューヨークの生活をすてる決心をし、大地に接したいため、自分の求めているものを手に入れたための準備をする。
自分が心から欲することをそれぞれみつける。ウィラは自分の中から何かを生み出すことであり、ロジキーは大地との絆、田舎へ戻りたいという欲求(desire)をかなえることであった。作家になる準備 <sup>(33)</sup> をしはじめたキャザーと、大地へ戻るために貯金をしはじめたロジキーと。35才のときロジキーはオマーハへとニューヨークを去り、ウィラは38才で編集者の仕事をすてた。		

☆                         ☆                         ☆                         ☆

「この世の別の場所で運を試すために」to try his fortune in another part of the world<sup>(34)</sup>  
38才のウィラと35才のロジキーは出発した。

主人公ロジキーは65才のチェコ人である。キャザーは何故、主人公をチェコ人にしたのであろうか。レッドクラウドやキャザートンで出会った人々の中にチェコ人がいたことや、モデルがチェコ人であったためであるということは勿論だが、やはり、紀元前700年にはじまるこの東欧の目立たないが伝統のある国、すぐれた音楽家・芸術家を生んだこの工業国に魅かれたからであろう。また主人公を65才という高齢にしたのは、キャザーの得意とするテーマ、美しい過去への回想の巧みな扱いを展開し結論づけたかったからだろうし、やはりこれまで通りに主人公の死までを完璧に書き、さらにその死に方、死んだ後までを評価したかったからだ。ロジキーはたった今、エド医師から心臓が悪いと宣告されたところだ。少年時代からロジキーの世話になってきたエド医師は、ロジキーに病状を告げなければならなかった自分の立場を悲しむ。しかしロジキーは、今言われた事柄を真正面から受けとめようとししない。力仕事はするなという医師に向かって、農夫に力仕事を禁ずるなんて心外とばかりにとこののである。

“Well, I guess you ain’t got no pills fur a bad heart, Doctor ED. I guess the only thing is fur me to git me a new one”<sup>(35)</sup>

「おや、すると悪い心臓に効く薬をお持ちじゃないんですかい。エド先生。じゃ新しいのと自分でとりかえるしか手がないわけですな」

新しいのとは新しい心臓の事である。私なら古いのをもうすこしもたせませんがね、と悲しがるエド医師に、肩をすくめてロジキーは言う。

“Maybe I don’t know how.”<sup>(36)</sup>



「多分、わしはどうしていいかわからんのでしょな」

キャザーは自分自身の生き方(超然とした感じ, 見物人の気楽な様子)(a certain detachment, the easy manner of an onlooker and observer)をロジキーに刷り込んでしまっている。心臓が悪いといっても、5～6年は大丈夫ですよと言いながらもさらに体に気をつけるよう注意をするエド医師。ロジキーの家では21才から13才に至る5人の男の子が皆、大地との絆をしっかりと結び、親子の絆をしっかりと結び、工場で働いたりせず家にいるのである。ロジキーを父親として尊敬し、兄弟争うこともない。

“You are one of the few men I know who has a family he can get some comfort out of”<sup>(37)</sup>

「あなたは子供たちから心の慰めを得られる数すくない人ですよ」

‘some comfort’を子供たちから得られる親はどのぐらい世の中にいるだろうか。親ですら得られる comfort. 子供たちは充分ロジキー夫妻から得ていたことだろう<sup>(38)</sup>。処方箋を書きながらエド医師は長男の嫁ポリー(アメリカ人)とロジキーの妻・メアリーの関係を心配する。ロジキーはチェコ人である自分の息子ルドルフがアメリカ人を嫁にした事でいさか戸惑ってはいるものの、喜んで迎え入れようとしているが、アメリカ人ポリーはチェコ人の家庭に入りこめず、苦しんでいるのだ。面白いことに現実のキャザーは、大地しかないアメリカ、土の奴隷のように働かなくてはならないアメリカ人達、それに反して、文化と伝統、芸術のヨーロッパという図式を若い頃は固持しつづけたのに、この作品では大地と結びついているヨーロッパ、都会化されたアメリカとなっている。田舎育ちのメアリーは言う。

“Town girls is used to more than country girls”<sup>(39)</sup>

「町育ちの娘は田舎育ちの娘より遊ぶものよ」

ロジキーの子供たちは『私のアントーニア』の子供たちがそっくり大きくなった感がする<sup>(40)</sup>。またメアリーもアントーニアの第二の結婚後十数年たっているという感がある。先にのべたが、アントーニアのモデルとなったアンナ・パヴェルカは18才で結婚し、たちまち夫に逃げられ、数年後多くの子供をつれてキャザーの目の前に現れた。アントーニアはまさにアンナであるが、メアリーの50才という年令から考えてこの結びつき、アンナ=アントーニア=メアリーは正しいと考えられる。そしてそのいずれも、そのかみの種族と始祖のように、豊かな生命を生み出す源(a rich mine of life, like the founders of early races)である。母性愛に満ちあふれたメア

リーに守られている者たちは皆心地よい。あんなに暖く人を迎え、あんなにこっとりしたミルクの入ったおいしいコーヒーを出す家はロジキーの家をおいてほかにはない、とアメリカ人医師エドは断言する。独身でホテル暮らしをしている自分を弟のように思ってくれるメアリー、他人に訪ずれる幸運を自分の事のように喜ぶメアリー、おしゃべりで働きもので、夫を心から愛し自分たちの結婚生活を “It was a hard life, and a soft life, too.”<sup>(41)</sup> 「(物質的には) つらかったけれど、(精神的には) おだやかだった」とふり返るメアリー。

しかし、とエド医師は思う。勤勉な一家がどうしても裕福にならないかと。なるほどあまり機を見るに敏ではない一家だ。心地よい生活と、借金がないこと、それだけしかない一家だ。そうだロジキー一家の様に寛大で温かい心を持った情愛深い人達は銀行に貯金などどうも出来ないのだと<sup>(42)</sup>。

パーリー医院を出てロジキーは家路につく。あの時、はじめて土地を手に入れようとした時、高くて手が出なかった、美しい沃野ハイプレーリーを楽しんで通る<sup>(43)</sup>。墓地にさしかかったとき初雪の中でしみじみ自分の家をながめるのだ。そして、もし死んでも遠くへ行くのではない、町の墓地 死者の町、忘れ去られたものの町に行くのではなく、ここ、家の者たちが往来する、家が見える所に葬られるから大丈夫 (a comfort) だと思うのだ。—And it was a comfort to think that he would never have to go farther than the edge of his own hayfield.<sup>(44)</sup>—

それに、こんな風に雪が降れば、あの世とこの世がとても近くなってみんなとも話せるのではないか<sup>(45)</sup>と自分をふるい立たせてみる。家に帰ってメアリーに診断の結果を話すのがなかなかやっかいだ。ロジキーはぬらりくりりと逃げるが、メアリーは二十数年連れそっていた自分が、ロジキーの心臓の具合が悪いことに気づかなかったと驚き悲しむ。ロジキーをじっくり観察しながら元氣そうな姿にホッと胸をなでおろすのだった。ロジキーは若い頃仕立屋だったので、衣類のつぎはぎなどしながら過去の日々 (Old Days) をふりかえるのである。

過去の日々は楽しいものばかりではなく、今だにロジキーの心に深い痕を残していて、他人に決してさわられたくないものもあったのだ。(Those days had left a sore spot in his mind that wouldn't bear touching.<sup>(46)</sup>) そのつらい二年間の後、ロジキーは約7、8年ニューヨークで仕立屋として成功し、ニューヨークを愛し、満足しきって生活した。しかし何かロジキーにつきまとい悩ませたのだ。ロジキーは深酒をし、二日酔いに苦しみ、ひたすら仕事をし、また深酒をした。ニューヨークでの生活はロジキーに実はあっていなかったのだ。環境への不適応<sup>(47)</sup>、これが長い間のキャザーのテーマであったが、キャザーはその環境からロジキーを脱出させた。シメルダ氏<sup>(48)</sup> やポール<sup>(49)</sup> のように自殺はさせなかった。ある年の7月4日、独立記念日に、ロジキーははっきり大地との絆を思い出すのである。幼い頃、母を亡くし、母方の祖父母に12才まで育てられたあの期間に結んだ大地との絆を求めて、その後約7、8年貯金をして、自分の心の求める (desire) 場所へと旅立つのだ。勿論キャザーも作家への道を走りはじめたのだ。38才で。

この時のロジキーの回想は35才で終っている。

外国人と結婚したことと不作のせいで、お互い神経質になっている若い二人を何とか楽しませようと、ロジキーは二人を町へ映画を見に行かせる。メアリーがよく言う‘city bred’（都会育ち）のロジキーにとって、町育ちのポリーの淋しさはよくわかったのだ。

“Don’t you ever get lonesome out here?”<sup>(50)</sup> 「(ニューヨークに住んでいらした) あなたがこんな田舎においでになって淋しく思われたことはありませんか」着替えをして来るようにとやさしく両ひじをつかんでポリーを部屋の方へ押したとき、涙声でポリーは言ったのだ。そしてポリーにねだられるまま、あの一番つらかった日々について話す約束をしてしまうのだ。しかしこれも、近代的工場で、毎月の収入を約束されて働きたがっているルドルフを何とか土につなぎとめておくためだった。都会育ちのポリーにとって大地との絆が、自然との絆がどんなものであるかわかるはずがないのだ。

But to Rosichy that meant the end of everything for his son. To be a landless man was to be a wage-earner, a slave, all your life; to have nothing, to be nothing.<sup>(51)</sup>

しかしロジキーにとって、工場で働くということは息子にとってあらゆることの終りを意味しているように思えるのだ。土地をもたない人間になるということは、賃金労働者になるということ、一生奴隷になるということだ。何も持たないということ、何者でもないということだ。

ロジキーはルドルフにクロード<sup>(52)</sup> のようになってほしくなかったのだろう。何かとの絆がある、土地との絆があるということで人は生きられる。クロードは自分を土地の奴隷のように思い逃げたが、万一、土地をはなれて生活すれば、雇用者側であれ被雇用者側であれ、お互い憎しみあい、ののしりあわなくてはならない。だから、ここに、この土地にいてほしいと願うのだった。しかし、そう思いながらロジキーの心は、知らずしらず死を予感してか滅びていく命たちよりも、滅びない大地、星たち、そして高貴な暗闇へと向うのだった。

クリスマスの前日、ロジキーの痕の回想とポリーを含む家族の者たちへの勇気ある思い出話がづく。ロジキーは言う。

‘You boys don’t know what hard time is. you don’t owe nobody, you got plenty to eat and keep warm and plenty water to keep clean. When you got them, you can’t have it very hard.’<sup>(53)</sup>

「おまえ達には真の貧乏がどんなものかわかりはしないのだ。今、おまえたちは誰にも金を借りてはいない。たべものはたくさんあるし、体をあたたかくするものもある。体をきれいにしておく水もたっぷりある。これだけ揃っていれば、今の状態を貧乏だなんていえるはずがな

いんだ」

ロジキーは皿を洗う水にもこと欠く生活をして来たのだ。いつも飢えていて、もうつぎがあてられない位ボロボロの服を着て二年間ロンドンで過したのだ。しかしルドルフはポリーを満足させなくてはならない。こぶしをかためて、お天とうさま次第の農業はこりごりだ、という。メアリーはそのお天とうさまが一番ひどいことをした日、つまりある年の7月4日、独立記念日の午後3時に熱風が一粒残らずとうもろこしを焼いてしまった年の事を話す。ロジキーは、まず子供たちと水浴びし、夕方にはワインを飲んでたっぷり豪華な食事を果樹園<sup>(54)</sup>でとり、それから今後のことを考えたのだ。

“your father wouldnt neuer takenothing very hard, not even hard times”<sup>(55)</sup>

「お前たちのお父さんは、どんなことも、辛いなんて考えない人なんだよ、本当に大変なときでもね」

雪の降らない冬を迎えたということは、農夫たちにとっては翌年の不作を意味するものだった。特に結婚して2年目に入るルドルフ夫婦は2年続きの不作を迎えることになる。ロジキーは、そしてメアリーも若い頃には、自分たちは耐えなくてはならない事には耐えぬける、という自信を持ち、耐えて来た。しかし、簡単にお金が入る工場労働という仕事がある今、ルドルフに耐えさせることは困難だった。ロジキーはふと約40年前、自分が何を求めているかわからなくなり、苦しんだ日々のことを思い出した。あの時は自分が心から求めているものを探そうとした。そして今は、自分が息子たちに求めていることは、自分の死後も是非息子たちにここにいて、この土地で働いてほしいと望んでいることだと気づくのである。ここにさえすれば人間の酷い面を見たり、酷い仕打ちをうけることもない。なるほど農業は時には凶作・不作もあり辛い生活をしなくてはならないが、しかし工場労働者となって不誠実な人間や冷酷な人間に傷つけられるよりはずっといい。田舎ではみんなお隣りさんというつきあいだが、都会では、仲間をあざ笑い、だまし、仲間に毒を盛るような人々と生活を共にしなくてはならない。今、不作のため貧乏に苦しんでいるルドルフですら、友人のためには自分の着ている服まで与えるような人間に成長してしまった。だから出来れば、人間の残酷さ (the cruelty of human beings) を知らないで一生を送ってほしいとロジキーは願うのである<sup>(56)</sup>。

春が来たが土は骨のようにかたかった。ロジキーは息子たちに、耕しまぐさとなるアルファルファを植えるようにすすめた。緑色になった耕地を見て、ロジキーは旧世界、つまりチェコにいた頃、いや幼い頃をふと思い出した。アメリカ・ネブラスカに来て20年余、アメリカに来て40年余になるロジキーが、この試練の時になつかしむのではなく生きてきたその一部として旧大陸を

思い出すのだ。

ある日、エド医師がシカゴで開かれる学会に出かけ、ルドルフが町へ出かけたすきに、アルファルファの成長を妨げるあざみを掘りおこし耕そうとした。そしてついに心臓の発作が起き、ジャックナイフで胸を刺されるような痛みで襲われる。痛みを耐えながらルドルフの家の風車小屋にたどりついた時、ポリーがほっそりしたグレイハウンド (a slim greyhound) のように走って来てその細い肩をロジキーの腕の下に入れる。

“Lean on me, father, hard! Don’t be afraid.”<sup>(57)</sup>

「つかまって、お父さん。しっかりつかまって！ 怖くありませんからね」

結婚以来、一度だってロジキーをお父さんと、また、メアリーをお母さんと呼んだことのなかったポリーが、意識せずにいった言葉がこれだった。ポリーの中ではいつの間にか、ロジキー一家を外国人という目で見える意識は消えていたのだ。ポリーは自分のベッドにロジキーを休ませ看病してくれたのだった。ポリーがやさしくロジキーの手をとると、ロジキーは、まじまじと愛情をこめてポリーの目をのぞきこみ、そして、ポリーの中に新しい生命が芽ばえたことを感じとるのだ。

“I guess maybe there is something of that kind going to happen. But I haven’t told anyone yet, not my mother or Rudolph You’ll be the first to know.”<sup>(58)</sup>

「ええ、どうやらそんなようなことが起きかけていますわ。でも私、まだ誰にも、母にもルドルフにも話していませんのよ。おわかりになったのは、あなたが最初ですわ」

アメリカ人とチェコ人の子供。二つの血の流れを持ったものが誕生する！ ロジキーはその赤ん坊を見たいと言いほとして目を閉じた。ロジキーの寝顔をじっと見ていたポリーは、この世でロジキーほど自分を愛してくれる人はいないと確信するのである。そして茶色のよく陽に焼けたあたたかい大きなしなやかな手、知性と寛容を秘めた手、ジプシーのような手にほれぼれと見入るのである。

家に帰った翌朝、メアリーがひよこに飼料<sup>えさ</sup>をやりに行って一人になった時、昨日の痛みが再びロジキーを襲った。

He put his pipe cautiously down on the windowsill and bent over to ease the pull. No use—he had better try to get to his bed if he could. He rose and groped his way across the familiar floor, which was rising and falling like the deck of a ship. At

the door he fell. <sup>(59)</sup>

彼はパイプを注意深く窓のしきいの所におき 心臓のひっぱりを柔げようとうつむいた。むだだった。出来ればベッドに行ったほうがよいと思った。彼は立ちあがり歩きなれた床の上を手探りであるいた。床はまるで船の甲板みたいに上下にゆれた。彼はドアの前で倒れた。

ロジキーは逝った。息子たちにここにいてくれることを願いつつ、二つの文化の結晶を見たいと願いつつ。自分の留守中に逝ってしまったロジキーに対してエド医師は悔恨のあまり、ロジキー一家に足がむかなかった。しかし、月の光が白く降り注ぐ初夏のある夜、自然とロジキーの眠る墓地にと足が向き、初雪の中でロジキーが見たと同じ光景を目にするのだった。

Nothing could be more undearthlike than this place: nothing could be more right for a man who had helped to do the work of great cities and had always longed for the open country and had got to it at last, Rosicky's life seemed to him complete and beautiful. <sup>(60)</sup>

この場所ほど死のにおいのしないところはない。この場所ほど、大都会で働き、田舎を恋い慕い、ついに田舎に戻った男にふさわしい場所はない。ロジキーの一生は完璧で美しいものだったとエド医師には思えたのだった。

ちなみにキャザーの眠っているところは、ニュー・ハンプシャー州のジャクリセンターの旧墓地、マナドナック山を望む静かなところである。

## 〈結 論〉

キャザーは、『隣人ロジキー』を書きあげる前にさまざまな個性を持った主人公を書き問題を提起して来た。新世界と旧世界の対立、いや伝統のないこととあることの差異はキャザーの最も大きなテーマだったが、『大司教に死は来たる』で納得の坂道をおりはじめ、この作品では両者の結晶まで生み出そうとしている。あるがままに筆を運ばせることによって、環境への不適応に苦しんだり不当な扱いに苦しんだりする必要もなくなり、道を見つけ、絆をさぐり出した。また、過去はいつもなつかしい Happy days とは限らないだけでなく、過去という遠い存在ですらないのだ。すぐ手近かにあって現在とも大いにかかわりがあるのである。そして自然の中で、自然と一体になり、風景そのもののように人はなるのだ。自然という物事の根幹にどっしり落ちつき、自然と一体になるという、あらゆる慾望中の慾望を見つけ出し、それを手に入れたのだ。自然との絆こそ、大地との絆こそ、時との絆こそ人のみつける真実中の真実なのだ。ロジキーの生

涯こそ完璧な生涯といえる。ロジキーの死によってキャザーは完璧な死、完璧な生を書いたのである。

(注)

- (1) *The Professor's House* p.263.
- (2) regionalism
- (3) *O Pioneers!*
- (4) William Cather
- (5) Jasper Cather
- (6) まず祖父と伯父一家、その後ウィラー家が移住した。
- (7) Catherton, ネブラスカ州, ウェブスター郡の西寄り、多くのキャザーの作品の舞台となっている。
- (8) William Cather M. D.
- (9) *My Mortal Enemy*
- (10) *Neighbour Rosicky* p.24.
- (11) *Alexander's Bridge*
- (12) maladjustment
- (13) maltreatment
  
- (14) ugly duckling
- (15) detachment この言葉は *Neighbour Rosicky* の第2頁で、ロジキーの顔の説明をするときに使われている。即ち、This gave him a certain *detachment*, the easy manner of an onlooker and observer. p.8.
- (16) *O Pioneers!* p.261.
- (17) *The Song of the Lark*
- (18) Anna [Annie] Pavelka かつてはウィラーの幼な友達の家の中だった。
- (19) *My Antonia*
- (20) Ibid. p.339.
- (21) キャザーは殆んど作品において主人公の死を描いているのは、この信念からと思える。
- (22) *One of Ours*
- (23) the feeling of being unrelated to anything, of not mattering to anybody. Ibid. p.135.
- (24) *A Lost Lady*
- (25) *My Mortal Enemy* p.301.
- (26) *Death Comes for the Archbishop*
- (27) Ibid. p.44.
- (28) Ibid. pp.336~337.
- (29) *Obscure Destinies*
- (30) 既出。(19) 参照。
- (31) Annie's husband, the "*Neighbour Rosicky*" of *Obscure Destinies*, was as proud of his children as his wife was. Neighbours told him he should sell his cream, get more money, and buy more land, but he agreed with Annie ("That's right, mama!") that roses in the cheeks of their childrens were more important than land or money in the bank. *The World of Willa Cather* p.51 (cf: *Neighbour Rosicky* pp.24~25).
- (32) These days, when he was nearly always hungry, when his clothes were dropping off his for

- dirty...*Neighbour Rosicky* Ibid p.26 (cf. Ibid p.40).
- (33) So much stone and asphalt with nothing going on, so many windows The emptiness was intense,... Ibid p.29.
- (34) Ibid. p.31.
- (35) Ibid. p.8.
- (36) Ibid. p.8.
- (37) *Neighbour Rosicky* p.9.
- (38) *My Mortal Enemy* の項参照されたし
- (39) *Neighbour Rosicky* p.33.
- (40) 註. (2) 参照.
- (41) Ibid p.24.
- (42) キャザー自身は経済的不安に大変恐怖を感じていたから、稼ぎ貯金をしたと思われる (但, 38才まで)
- (43) He enjoyed looking at these fine farms, as he enjoyed looking at prized bull. *Neighbour Rosicky* p.18. ロジキーは人を羨まず、現在を楽しんでうけとめる男。
- (44) Ibid. p.19.
- (45) Ibid. p.20. *O Pioneers!* では、アレクサンドラがいつも雨か雨の降りそうな日に弟の墓参をした。  
キャザーはあの世とこの世のカーテンが雨とか雪がふると一時的によがり死者と話が出来る。といった自然との一体感を持っていた。
- (46) *Neighbour Rosicky* p.26.
- (47) 註. (12) 参照.
- (48) *My Antania* アントニアの父、故国にいた時パイオリニストだったが開拓民としての生活に順応出来ず銃で自殺。
- (49) *Paul's Case* 才能のある少年が最後に鉄道自殺をする。
- (50) *Neighbour Rosicky* p.35.
- (51) Ibid. p.37.
- (52) *One of Ours.* の主人公
- (53) *Neighbour Rosicky* p.41.
- (54) かつてポヘミヤの人びとの間には、果樹のみのりの多いことを願って、Good Friday に焼いたパンの食べ残しやパンくずを果樹園で焼く風習があった。
- (55) *Neighbour Rosicky* p.41.
- (56) Ibid. p.53.
- (57) Ibid. p.56.
- (58) Ibid. p.58.
- (59) Ibid. p.61.
- (60) Ibid. p.62.
- (61) Ibid. p.41. 参照。  
ロジキーは、ロジキー自身がかつてポスのために貧しい人々から 苦しみや飢えから狼のような顔になった女からお金をむしり取らねばならなかった経験がある。
- (62) alfalfa: アルファルフア, ムラサキウスゴヤシ (クローバーに似たマメ科の牧草) Ibid. p.55.  
尚テキストは Kyoto Rinsen Book Company. 1973年版を使用した。